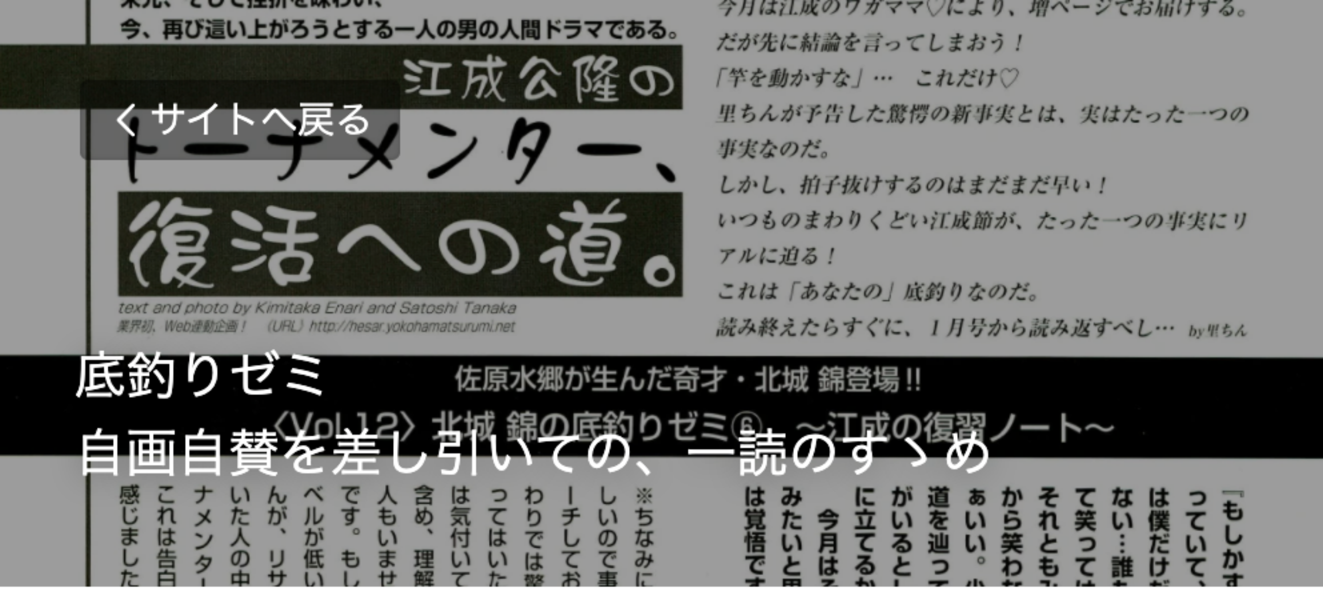

今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の
トーナメンター、
復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連動企画！ （URL）http://hesar.yokohamatsurumi.net

今月は江成のワガママ♡により、増ページでお届けする。
だが先に結論を言ってしまおう！
「竿を動かすな」… これだけ♡
里ちんが予告した驚愕の新事実とは、実はたった一つの事実なのだ。
しかし、拍子抜けするのはまだまだ早い！
いつものまわりくどい江成節が、たった一つの事実にリアルに迫る！
これは「あなたの」底釣りなのだ。
読み終えたらすぐに、1月号から読み返すべし… by里ちん

佐原水郷が生んだ奇才・北城 錦登場！！
〈Vol.12〉北城 錦の底釣りゼミ⑥ ～江成の復習ノート～

底釣りゼミ
自画自賛を差し引いての、一読のすゝめ

2020年10月27日・ヘラ釣り

北城版底釣りゼミ

10月の釣りは4日の流源湖から始まって、25日の椎の木湖まで計7回出撃しました（内1回オデコ♡）。オール底釣り。流石にここまで徹底したことは過去に無いと思いますけどね。本来はこういう作業が、底釣りシーズンたる「冬」に向けて必要なのかもしれません。

しかしそれも過去形で、通年「宙」で勝負になりますから、底釣りを真剣に学ぼうという人は多くはありません。でも、メーカーのヘラ釣り動画を見ていると、底釣りが圧倒的に再生回数多いんですよね。某月刊誌の編集者に聞いても、答えは同じでした。一番人気のわりに、「マスター」が少ない釣り。この乖離は何故なのか。普通に考えれば、人気があればあるほどピラミッドも大きい訳ですから、上級者も多い筈なんですが。

その謎を解き明かそうとしたのが「底釣りゼミ」シリーズです。月刊へら鮒、「トーナメンター、復活への道。」というタイトルの連載の中で、何度か書きました。故・北城氏の名を冠したものが、最初の原稿ですね。育児に疲弊する女房そっちのけで家庭崩壊寸前になりながら、7ヶ月に渡って書きました。最後の月はオマケなんで、悩める底釣り愛好家の皆様に読んでいただきたいのは、北城版底釣りゼミの第六回目である「江成の復習ノート」です。

いま読み返すと本当に読みにくい文章です。謙遜でなく、自画自賛する気には全くなれません。もちろん僕も、「自分カワイイ」ですから、書いた当時は「凄いものを書けた！」と、オナニーで満足していました。「間違いなく核心である」と確信した北城理論に大興奮していましたしね。実際今も北城理論は素晴らしいと思っています。ただ僕の文章が、北城理論だけでなく自分にも酔い過ぎていただけです。

なので、僕の文体にはぜひ目を瞑って、ご一読いただきたいんですね。本当は、冷静に書き直して世に問い直せば良いのでしょうが、そうそうチャンスはありません。このタイミングで某誌にて始まる新連載の中で、底釣りに詳しく触れるかどうかは未定です。自分の中では「伝え方（表現方法）」や「視点」で新しい気付きはありましたが、しょせん北城理論から導かれる枝葉であり、新発見と呼べるものは何もありません。本気で学びたければ読みにくい古い文献を当たってください（笑）。

隣で宙ガー！おじさん

北城版底釣りゼミは、好きになればなるほど、知れば知るほど、「スレまくる（たぶん笑））」底釣りの謎を、迷路にハマった自分自身をモデルとして書き上げた記事になります。実はコレを書いた当時の2002〜3年はもちろんのこと、自身がハマった90年代前半には既に、「通年、宙」が嘆かれていました。イマドキを嘆くのはいつの世も同じです。

とはいえ、ヘラ釣りの歴史はたかだか100年です。近代に通ずるスタイルになる前の黎明期には、観察からの発見と開発が優先であり、釣りの「型」を気にするようになったのは70年代以降のことだと思われます。もっとも、関西ではウドンを用いた「床」釣りの歴史が古く、「ヘラは底釣りが王道」という固定観念には根深いものがあります。

関東では、65年に初のヘラ専門誌である「へら鮒」が創刊。69年に美濃部都知事による公営ギャンブル廃止を受け、釣堀は買い取り制を廃止し、純粋に娯楽として釣り客を維持するための大量放流時代へ移行。現代に通ずる数釣り技術が生まれていきます。

ただし、80年代までは底釣り規定の釣堀も多く存在し、「底釣りもやるのが当たり前」だったことを思えば、「宙しかやらない若者への嘆き」は、90年代に発生したと言えるのかもしれません。幼少期は多摩川メインのヘラ釣りもどきであり、90年前後に「宙」で本格的にヘラを再開した僕は、まさに時代の申し子と言えるでしょう（笑）。

「勝負に使える」レベルの底釣りを習得しないまま、メジャートーナメント全国大会に出場してしまった僕に、最初から底釣りが立ちはだかります。93年のジャパンカップはカッツケセットで予選通過しましたが、全国大会ではプラの時点で底釣りに勝てないと思いました。同じ年のダイワマスターズはメーターセットで予選通過、全国大会は「黙って底釣り」なゲキシブ。そこから猛練習が始まることになりますが、自力で迷路を抜け出すことはできませんでした。21世紀になって北城氏の底釣りを知るまで、暗黒の世紀末を彷徨うことになります。

では現在の自分が底釣りを完全にマスターできたのかと言えば、もちろんノーです。そんなふうには思っていません。先日FBでも続けて書いたように、自分は凡人です。スギタツと並べば、釣果も貧果です。

> 30年前の僕の底釣りなら、午前中は間違いなくデコでした。午後、ヘラが溜まった一人舞台で、スレかきまくりながらで5枚くらいなら、間違って口に入ったんじゃないかな。そういう分析ができる今が嬉しいですね。

> チンプンカンプンで数字しか拾えない人には、「スギタツが帰るまでに江成との釣果は5倍の差がついた」、「だからスギタツはやっぱスゲー」でも良いんだけど、じゃあ午後もスギタツが釣りを続けてたら5倍の150枚釣れたのか？って言ったらそれは流石に違うでしょ。

それでも、パズルを解く楽しさは味わうことができます。天才と違って時間は掛かっても、ゴールを目指せる方法論を学びたいんですね。そのためには、食わず嫌いはいけません。ドボンもやります。自分は元々宙から入ったので問題ありませんが、宙をやったことない方は宙もやってください。そうしないと見えないものがあります。釣りは全て繋がっているからです。

「隣で宙を打たれたから底釣りが釣れなかった」

よく聞く言い訳ですが、これを言う底釣りマニアに名人は一人もいません。批判を覚悟で断言しましょう。

「ドボンなんか…」

と嘲笑うバランス底名人も全員エセです。逆も然りですよ。バランスは苦手だけどドボンは得意ってヤツ。ありえませんから（笑）。実はこの辺は、北城版底釣りゼミで触れています。

ドボンのセッティングに細かい拘りを見せるアングラーは多く存在します。それぞれ、それなりの効果はあるのだろうと思いますが、本質的にはたいした影響のない拘りであったりするのが実情です。たとえば中通し仕掛け。オモリの遊動幅を何センチにするか悩む前に、本当にオモリの中をイトが動くのかどうかを考えてみましょう。

ダブルスタンダード

ゼミ発表後、各誌の底釣り記事において、僕が多用した「テンション」や「沖打ち」という用語が目立つようになったと感じています。「角度」はあまり見かけませんが、各方面に一定の影響はあったのだろうと。もともと、言葉にはなっていなくとも肌で感じとっていた底釣り名人は沢山いた筈ですのでね。

では、あれから20年近い時が過ぎ、さぞ底釣りスキルの底上げが起きただろうと思いきや、そうでもないんですよね。トーナメントがもてはやされ、野釣り例会が取り上げられる機会が減り、底釣りが必修科目でなくなった今、解説できる人材に乏しいと感じます。「本当にわかってんの？」レベルで語れてしまうのもまた、釣れる「サワリ〜アタリ」がある程度確立された底釣りの闇なのです。僕のはじめての連載「どんまいフィッシング」でもそうでした。第一回目が底釣り（笑）*。

「沖打ち」が語られる一方、いまだに「きちんと落とし込み」という解説も溢れています。本当にきちんと落とし込めた「なら」、ナジミはたいして出ないにもかかわらず、「トントンでダンゴなら3〜4目盛りナジむ」という解説も混在。いやいやトップの太さにも拠るけど？なんていうツッコミ以前の問題です。そのくせ、「シモリ」は嫌うとか。まさにカオスです。

ヘラが底に張り付いているようなときには、誰にでも簡単に釣れます。いわゆる「底釣りらしい動き」は、長く釣りをやっていれば、一度は経験したことがあるでしょう。目に焼き付く、教科書どおりの動きです。それを、上っ調子の時に出せるかどうかが、底釣り理解の指標です。名人は食わせるけれど、そうでない人は「スレまくる」底釣りになりやすいケースで、代表的なのはコレです。僕は10年スレまくりました（泣）。

あ、あくまでも上っ「調子」であって、完全に上じゃ無理ですよ。底付近にたまにでも下を向くヘラがいなければ、誰だってお手上げです。

*調べたら、第一回目は宙のメータセットでした。短ハリスの紹介。第二回目が底でした。いずれにせよ、わかったつもりの底釣り（笑）。使用竿は今月の頭と終わりに使った四天王21でした。当時は最新（笑）。